2020 年　5 月 18 日

2019 年度　総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する（ ）に○を付ける	・共同研究（　）　　・個人研究（○）	
研究代表者 （所属・職・氏名）	文芸学部・教授・池上公平	
研究課題名	中世後期イタリア中部における絵画の動向	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
研究期間	2019 年 4 月 1 日　～　2020 年 3 月 31 日	

研究実績の概要（1）
本研究を進めるに当たって、学外で使用するためのノートパソコンを購入したが、助成申請時に希望していた機種が生産中止となり、加えてウィンドウズ 7 のサポート終了に伴う買い替え需要により、同等機種が入手困難となり、上位機種に切り替えざるをえなかった。そのため予算内訳を大幅に変更することを余儀なくされ、図書費の全額と旅費の一部をパソコンに充当し、残額をもって調査を行うこととしたが、コロナウィルスのパンデミックという予期せぬ障害のため、13 世紀の中部イタリア絵画の調査を目的として 2020 年 3 月に計画していたイタリアへの渡航が、大学からの自粛要請、イタリアでの移動制限、日本政府による渡航停止措置によって、断念することになったことはまことに遺憾である。結果として本研究は中途半端な状態で助成期間を終了することになった。なお、渡航中止のために執行しなかった旅費は返金済みである。 2017 年度に総文研の助成を受け実施した研究(研究課題名：十字架の美術　副題：中世・ルネサンスの美術におけるフランチェスコ会の影響)においては、ニューヨーク、ボストン、ワシントンで調査を実施し、イタリアとビザンティンの関係の重要性を再認識するに至った。その知見をもとに総文研紀要の論考を執筆、刊行したが、諸種の制約もあり、研究は十分掘り下げるまでに至らず、問題提起にとどまった。そのため、よりいっそうの深化をはかるべく、13 世紀を中心とした中部イタリア絵画の研究を、フランチェスコ会との関わりにおいて行うことを意図した。 前回の課題に「十字架の美術」という語を挙げておいた。十字架は聖フランチェスコとその修道会の活動にとって決定的に重要であり、したがってその美術活動においても本質的な重要性を持つ。その研究が引き続き今回の研究の中核をなすものである。しかしながら、そもそも十字架が美術においていつから現れ、どのような展開をたどって 13 世紀に至ったかを無視することは土台を構築せずに建物を建

研究実績の概要（２）
てようとするに等しい。それゆえ、キリスト教成立から 13 世紀に至るまでの十字架の美術における展開をたどり返すことに取り組んだ。André Grabar, *Christian Iconography*, Princeton University Press, 1968、Robin Jensen, *The Cross*, Harvard University Press, 2017 を手がかりとしてこの問題の解明に着手したところである。このほか、アンドレ・グラバール『キリスト教美術の誕生』(新潮社　1967)、同『ユスティニアヌス黄金時代』(新潮社 1969)、Ernst Kitzinger, *Byzantine Art in the Making*, Cambridge Mass., 1980 を参照しつつ進めている。 美術において十字架が表現されるには、教会において十字架をキリスト教における重要なモティーフと見なす見解が成立していなくてはならない。そのため初期教会における十字架にまつわる思索がいかなる展開をたどったかを見極める必要が生じた。この問題に関しては、聖パウロにおけるいわゆる「十字架の神学」がきわめて重要である。聖パウロにおける十字架に関する思想に関しては、青野太潮『十字架の神学の成立』ヨルダン社　1989、同『最初期キリスト教思想の軌跡』新教出版社　2013、フスト・ゴンザレス『キリスト教思想史』　新教出版社　2010、ジャン・ダニエルー『キリスト教史Ｉ　初代教会』平凡社　1996 を参照しつつ考察する。当時の神学文献の調査も必要であるが、未着手である。コロナウィルスによる各大学図書館が閉鎖されているため延期せざるをえず、今後いつ再開できるかは見通しが立たないのが現状である。また海外渡航もいつ可能になるかはわからず、現時点では今後の研究の進展は予測がつかない。しかし、すでに入手済みの文献を通じて、現状で可能なことを行うことで、研究を継続する所存である。